

# 催眠予期と被催眠性の関連における催眠状態に対する 信念の調整変数としての役割

清水 貴裕\*

## Role of Beliefs about Hypnotic States as a Moderating Variable for the Relationship between Expectancy and Hypnotic Response

Takahiro SHIMIZU\*

This study examines the effect of beliefs of hypnotic states on the relationship between expectancy and hypnotizability. Participants were asked to complete the Beliefs about Hypnotic States Questionnaire-Revised (BHSQ-R) and a question of expectancy for their level of hypnotizability. Then, the participants were administered hypnosis and asked to complete behavioral and subjective scales towards their hypnotic responses. Hierarchical multiple regressions revealed significant interactions between the BHSQ-R subscales and expectancies reflected in the subjective hypnotic responses. The findings suggested that when participant expectancies were high, then it depended on the belief type if the expectation predicted hypnotic responses, especially for the interpretations of their behavioral responses during the hypnosis. The importance of promoting positive expectation and belief in a clinical setting was also discussed.

**key words:** belief, expectancy, hypnotizability

### 問題と目的

催眠暗示への反応の程度を表す被催眠性は、催眠を用いた心理臨床的介入の効果に影響を及ぼすと考えられてきており、被催眠性と催眠を用いた介入の効果に関するメタ分析の結果においても弱いもしくは中程度の効果量が得られることが示されている (Montgomery, Schnur & David, 2011)。こうしたことから、これまで被催眠性の個人差を説明する様々な要因が検討されてきた。

被催眠性に影響を及ぼす要因のひとつとして、古くから指摘され、取り上げられてきた要因に「自分は催眠に入ることができる」という催眠暗示への自身の反応に対する予期 (expectancy, 以下、催眠予期) があり、これまで数多くの研究がなされてきて

いる (Barber & Calverley, 1969; Melei & Hilgard, 1964; Spanos & Barber, 1974; White, 1941)。例えば Melei & Hilgard (1964) は、どの程度催眠されるかについて参加者に自己予想をさせ、その後測定した被催眠性との間に  $r=.16\sim.29$  の弱いながらも有意な正の相関を報告している。同様に、Barber & Calverley (1969) は、110名の参加者に「どの程度催眠されることを望むか (欲求)」と「どの程度深く催眠されると予測するか (催眠予期)」を測定し、それぞれ被催眠性との間に有意な正の相関 ( $r=.36, r=.33$ ) が得られたことを報告している。

近年では、「腕が下がる」というような特定の催眠暗示に対して、「(意図せず) 勝手に腕が下がる」といった不随意的な体験を自身がどの程度体験すると思うかという催眠予期を反応予期 (Kirsch, 1985)

\* 秋田大学教育文化学部

Faculty of Education and Human Studies, Akita University, 1-1 Tegata-Gakuenmachi, Akita-shi, Akita 010-8502, Japan  
e-mail: tshimizu@ed.akita-u.ac.jp

と呼び、多くの研究で被催眠性との関連を検討している。例えば Silva & Kirsch (1992) は、被催眠性を予測する変数として解釈的構え、反応予期、ファンタジー・プローンネス、解離傾向を比較した結果、被催眠性に直接的に影響を与えたのは反応予期であると主張している。また Kirsch, Silva, Comey, & Reed (1995) は没入性、解離傾向、ファンタジー・プローンネスといった性格特性および態度、反応予期と被催眠性との関係を検討し、被催眠性と関連があったのは態度と反応予期のみ（それぞれ  $r=.33$ ,  $r=.30$ ）で、特に反応予期は、腕の浮揚、視覚的幻覚といった比較的反応が困難とされている催眠暗示と関連があった（それぞれ  $r=.33$ ,  $r=.34$ ）と報告している。また、Benham, Woody, Wilson, & Nash (2006) は、スタンフォード催眠感受性テスト形式 C を用いて催眠暗示ごとに反応予期を測定し、反応予期が催眠暗示に対する反応影響を与え、さらに催眠暗示に対する反応が、後に続く催眠暗示への反応予期に与える影響について検討している。その結果、反応予期は催眠を実施している間ほとんど変化しないこと、潜在的な特性を統制しても反応予期が被催眠性に有意に影響を与えていることが示され、反応予期と被催眠性のダイナミックな関係が明らかにされている。しかし Benham et al. (2006) では、反応予期は被催眠性に有意な影響を与える一方で、反応予期では説明されない分散が大きいことも指摘している。

このように、これまで多くの研究で催眠予期と被催眠性の関連が示されてきているものの、Benham et al. (2006) が指摘するように、催眠予期だけで被催眠性の個人差を十分には説明できていない。その理由のひとつとして、Barber (1969 戸田訳 1975) は、「催眠ということばは多くの言外の意味をもっておりそして各被験者に正確に同じことを意味しない」ことをあげている。つまり、「催眠」とはどのようなものかについて人々が有する考えは様々であり、自分が催眠に入ると予期している催眠の内容と実際の催眠での体験が異なれば、催眠予期の程度と被催眠性の関連は低くなると考えられる。本研究は、こうした催眠に対する人々の考えが催眠予期と被催眠性の関連に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

人々が催眠に対してどのような考えを持っているかということは、催眠療法への動機づけや被催眠性

に影響を与えると考えられており、催眠に対する考えの内容や被催眠性との関連が検討されてきている (Carvalho, Capafons, Kirsch, Espejo, Mazzoni, & Leal, 2007; Green, 2003; Green & Lynn, 2011; Johnson & Hauck, 1999; London, 1961; McConkey, 1986)。しかし、これら従来の研究の知見は一貫しているとは言い難い。その原因として Shimizu (2014) は、研究によって催眠に関する様々な領域やレベルでの意見や考えを混同したり、催眠についての知識的・認知的側面と感情的側面を混同している点を指摘している。そして人々の催眠に対する考えを「催眠に入ると人はどのようなになるか」といった催眠中の具体的な経験内容に限定して「催眠状態に対する信念 (Beliefs about Hypnotic States, 以下、催眠状態信念)」と呼び、催眠状態信念質問紙 (Beliefs about Hypnotic States Questionnaire, BHSQ) を作成している。BHSQ を因子分析した結果、「解離離人様体験」信念、「自己コントロールの喪失」信念、「治療的期待」信念、「普段以上の能力発揮」信念の 4 因子を抽出している。

解離離人様体験信念は、「自分自身をまるで別の人間のように感じる」「自分自身がどこにいるかわからなくなる」など、催眠状態になると解離や離人的体験をするという考えに関連する項目から構成されている。自己コントロールの喪失信念は、「すべての決定を催眠をかける人にまかせる」のように、催眠状態では催眠者に操られるというような考えに関連する項目からなる。治療的期待信念は、「幼い頃の出来事を今現在起こっていることのように鮮明に思い出す」「普段は気づかない感情が表れる」など、いわゆる催眠療法の中で治療的効果をもたらすような状態になるという考えに関連した項目からなる。普段以上の能力発揮信念は、「普段よりも身体能力（足が速くなる、力が強くなるなど）が上がる」のように、催眠状態になると普段では考えられない能力が得られるという考えに関連した項目から構成されている。

Shimizu (2014) では、この催眠状態信念と、「催眠を受けたい (受けたくない)」といった感情的側面である催眠態度 (感情的催眠態度) を測定し、被催眠性の 2 側面 (行動的催眠反応性と主観的催眠反応性) との関連を検討している。その結果、治療的期待信念は感情的催眠態度に正の影響を、普段以上の能力発揮信念は感情的催眠態度に負の影響を及ぼ

し、間接的に行動的催眠反応性に影響することが示された。また、主観的催眠反応性には、治療的期待信念と普段以上の能力発揮信念が直接影響を与えていることが示され、催眠状態信念は、参加者が自身の催眠暗示に対する反応を解釈する際に影響を及ぼすことが示唆された。

さらに Shimizu (2016) では、催眠状態信念が心理的リアクティビティ傾向と被催眠性の関連に、調整変数として及ぼす影響について検討している。その結果、普段以上の能力発揮信念が高い参加者においては心理的リアクティビティ傾向が被催眠性（行動的催眠反応性）に影響を及ぼす、すなわち心理的リアクティビティ傾向が高い参加者は低い参加者に比べて被催眠性が低くなることが示された。また、治療的期待信念が低い参加者においても、心理的リアクティビティ傾向と被催眠性の間に同様の傾向が認められ、個人が有する催眠状態信念の違いが、催眠に対して心理的リアクティビティが喚起されるかどうかに影響を及ぼしていることが示されている。

前述した Barber (1969 戸田訳 1975) の指摘から、催眠予期と被催眠性の関連においても、この心理的リアクティビティ傾向の場合と同様の催眠状態信念の役割が予測される。すなわち、催眠予期が個人々の催眠に対する考えにもとづいて形成されるのであれば、個人の有する催眠状態信念の種類や程度によって、催眠予期が被催眠性に及ぼす影響の程度や方向性は異なってくると考えられる。つまり催眠状態信念が調整変数として催眠予期と被催眠性の関連に影響するといえる。本研究では、この催眠状態信念の調整変数としての役割について検討することを目的とする。また一方で、Shimizu (2014) の結果を考慮すると、催眠反応に対する主観的体験においては、催眠状態信念が催眠予期とは独立して直接影響を及ぼす可能性も残る。したがって本研究では、先行研究と同様に被催眠性を行動的催眠反応性と主観的催眠反応性の2側面に分け、催眠予期と催眠状態信念がそれぞれに及ぼす影響について検討する。

各催眠状態信念の調整効果に関する仮説としては、Shimizu (2014), Shimizu (2016) の知見から、治療的期待信念と普段以上の能力発揮信念が催眠予期と被催眠性の関連においても調整効果を持つと考えられる。すなわちこれらの信念を有する人々においては、催眠予期が高い場合には被催眠性も高まり、反

対に催眠予期が低い場合には被催眠性も低くなるものと考えられる。一方で、解離離人様体験信念と自己コントロール喪失信念は、催眠に対して一般にもたれやすい信念であり、催眠の体験を通して容易に変容する信念と考えられる (Shimizu, 2014)。そのためこれらの信念は催眠予期と被催眠性の間の調整効果は持たないと考えられる。

## 方 法

### 参加者

質問紙調査とその後の被催眠性の測定への参加を承諾した大学生 129 名（女性 57 名、男性 69 名、無記入 3 名、平均年齢 19.2 歳、 $SD=1.36$ ）。

### 調査内容

(1) 質問紙による調査 ①催眠状態に対する信念：改訂版催眠状態信念質問紙 (Beliefs about Hypnotic States Questionnaire-Revised, BHSQ-R) を用いた。これは清水・小玉 (2001) によって作成された催眠状態イメージ質問紙を再分析し (Shimizu, 2014)、解離離人様体験信念 (15 項目)、自己コントロールの喪失信念 (8 項目)、治療的期待信念 (8 項目)、普段以上の能力発揮信念 (4 項目) の 35 項目 4 因子として改訂した質問紙である。これらの質問項目に対して、人が催眠にかかるとそうした状態になると思うかどうかについて、「そうなると思う (4)」から「そうなると思わない (1)」までの 4 件法で回答を求めた。

②自身が催眠状態に入る程度に対する予期 (催眠予期)：自分が催眠を受けた際に、どの程度、自分が催眠にかかると思うかについて、「全くかからない (0)」から「完全にかかる (10)」として数値で表すよう求めた。

(2) 被催眠性の測定 本研究では、被催眠性を催眠暗示に対する行動的反応 (行動的催眠反応性) と、自身の行動的反応を不随感的に体験する程度についての報告 (主観的催眠反応性) に分けて測定を行った。

①行動的催眠反応性：Shor & Orne (1962) のハーヴァード集団催眠感受性尺度形式 A (Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility, Form A, 以下、HGSHS: A) を用いた。本尺度は、リラクゼーション教示を主とした催眠誘導と 12 項目の催眠暗示から構成されており、それらをあらかじめ CD に録音したもの

が参加者に呈示され、集団への実施も可能となっている。評定は参加者の自己報告により、各催眠暗示項目に対して行動的に「反応した(1)」か「反応していない(0)」かの2件法で行われ、合計得点は0～12点の範囲をとる。HGSHS:Aの日本語版は笠井・清水・徳田・斎藤(2003)によって標準化が進められており、妥当性、信頼性が確認されている。

②主観的催眠反応性: Kirsch, Council, & Wickless (1990)による Subjective Experience Scale for the Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility, Form A (以下, SES)を使用した。本尺度は, HGSHS:Aの各催眠暗示項目に対する行動的反応をどの程度不随意的に体験したと感じたかについて回答を求めるものである。回答は12項目の催眠暗示に対してそれぞれ「全く不随的に体験しなかったか意図的に行った反応(1)」と「不随意的な体験をした反応(5)」の具体的反応を対にした双極尺度で、5件法で評定された。日本語版については、清水・徳田・笠井(2003)によって標準化が進められており、妥当性・信頼性が確認されている。

### 手続き

まず初めに参加者に対し、BHSQ-R、催眠予期からなる質問紙調査を実施した。調査は、大学講義時間に集団一斉調査で行われた。質問紙調査の1～4週間後、大学内の実験室にてHGSHS:A(行動的催眠反応性)およびSES(主観的催眠反応性)による被催眠性の測定を実施した。CDに録音されたHGSHS:Aの催眠誘導と催眠暗示を参加者に呈示し、解催眠後、参加者はHGSHS:AおよびSESから構成された回答冊子により、催眠中の反応に関する質問項目に回答した。被催眠性の測定は一度につき参加者1～4名で行われた。参加者には催眠誘導および催眠暗示を実施するにあたり、途中で気分が悪くなったり、

嫌な感じがするようであれば、調査者にそのことを告げて催眠を中断してもよいことを伝えた。被催眠性の測定に要した時間は約60分であった。なお、調査者および調査協力者1名によって、催眠を実施している間に眠っていたり、参加意欲がきわめて低い参加者がチェックされた。

## 結 果

### 基礎統計量

HGSHS:Aによる催眠を実施している間に眠っているとチェックされた参加者のうち、調査者と調査協力者の間で意見の一致した者、また回答に不備のあった者を分析から除外した。その結果、最終的な分析対象者は124名(女性56名、男性65名、無記入3名、平均年齢19.1歳、 $SD=0.97$ )となった。

分析にあたり、各催眠状態信念としてBHSQ-R下位尺度ごとの項目平均得点を算出した。催眠予期は、0から10で回答された数値を催眠予期待点として用いた。また、催眠暗示に対する行動的催眠反応性得点および主観的催眠反応性得点としてHGSHS:AおよびSESの項目平均得点を算出した。それぞれの変数の平均値、標準偏差および相関係数をTable 1に示した。催眠状態信念の各下位尺度は、催眠予期および行動的催眠反応性、主観的催眠反応性とのいずれの間にも有意な相関が認められなかった( $r=-.09\sim.12, p>.10$ )。催眠予期は、行動的催眠反応性との間に有意な相関は認められず( $r=.12, p>.10$ )、主観的催眠反応性との間に弱い正の相関が認められた( $r=.20, p<.05$ )。

### 階層的重回帰分析

催眠予期と各催眠状態信念が行動的催眠反応性、主観的催眠反応性に及ぼす影響と、各催眠状態信念の調整効果について検討するために、行動的催眠反

Table 1 各変数の基礎統計量および相関関係 ( $n=124$ )

	Mean	SD	1	2	3	4	5	6	7
1. 解離離人様体験信念(解離離人)	2.53	0.61	—						
2. 自己コントロール喪失信念(自己喪失)	2.90	0.65	.71**	—					
3. 治療的期待信念(治療期待)	2.82	0.58	.62**	.54**	—				
4. 普段以上の能力発揮信念(普段以上)	2.28	0.80	.57**	.52**	.52**	—			
5. 催眠予期	5.12	2.44	.00	.03	.04	-.09	—		
6. 行動的催眠反応(HGSHS:A)	0.35	0.21	.06	.03	-.02	.02	.12	—	
7. 主観的催眠反応(SES)	2.45	0.90	.11	.11	.12	-.02	.20*	.79**	—

\*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$



**Table 2** 催眠状態信念と催眠予期による階層的重回帰分析 (n=124)

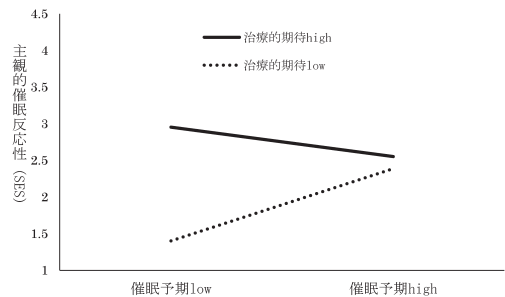
Step	行動的催眠反応性 (HGSHS:A)						主観的催眠反応性 (SES)					
	$\Delta R^2$	F for $\Delta R^2$	Adj $R^2$	Final step estimate values			$\Delta R^2$	F for $\Delta R^2$	Adj $R^2$	Final step estimate values		
				b	SE	$\beta$				b	SE	$\beta$
Step 1	.02	0.41	-.02				.06	1.55	.02			
催眠予期				0.04	0.04	0.09				0.29	0.15	0.16
解離離人				-0.01	0.07	-0.04				0.08	0.29	0.05
自己喪失				-0.04	0.06	-0.13				-0.08	0.23	-0.06
治療期待				0.10	0.06	0.27				0.74	0.24	0.48**
普段以上				-0.03	0.04	-0.11				-0.46	0.17	-0.41**
Step 2	.08	2.60*	.03				.11	3.76**	.11**			
解離離人×催眠予期				0.10	0.10	0.19				0.07	0.40	0.03
自己喪失×催眠予期				0.05	0.09	0.09				0.25	0.35	0.11
治療期待×催眠予期				-0.27	0.09	-0.42**				-1.20	0.36	-0.44***
普段以上×催眠予期				0.08	0.06	0.18				0.63	0.25	0.35**

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

応性得点 (HGSHS:A 得点) および主観的催眠反応性得点 (SES 得点) を目的変数とする階層的重回帰分析を行った (Table 2)。Step 1 には、催眠予期と催眠状態信念の下位尺度を説明変数として投入した。説明変数の値として、催眠状態信念の下位尺度については Aiken & West (1991) に従い、BHSQ-R 下位尺度得点をセンタリングした値を使用した。催眠予期待点については中央値で高低の2値 (0, 1) に変換して用いた。Step 2 では、センタリングした BHSQ-R 下位尺度得点と催眠予期により作成した交互作用項 (解離離人×催眠予期, 自己喪失信念×催眠予期, 治療期待×催眠予期, 普段以上×催眠予期) を投入した。

行動的催眠反応性得点を目的変数とした階層的重回帰分析では、Step 2 での決定係数の増分は有意であったものの ( $\Delta R^2 = .08$ ,  $F(4, 114) = 2.60$ ,  $p < .05$ )、決定係数が有意ではなかったため ( $R^2 = .10$ ,  $F(9, 114) = 1.40$ ,  $p > .10$ )、交互作用効果の下位検定については行わなかった。

次に主観的催眠反応性を目的変数とした階層的重回帰分析を行った結果、Step 2 での決定係数 ( $R^2 = .17$ ,  $F(9, 114) = 2.61$ ,  $p < .01$ )、決定係数の増分 ( $\Delta R^2 = .11$ ,  $F(4, 114) = 3.76$ ,  $p < .01$ ) ともに有意となり、催眠状態信念の下位尺度と催眠予期との交互作用が認められた。主観的催眠反応性に有意な影響を及ぼす交互作用項は、治療期待×催眠予期 ( $b = -1.20$ ,  $\beta = -.44$ ,  $p < .001$ ) と普段以上×催眠予期 ( $b = 0.63$ ,  $\beta = .35$ ,  $p < .01$ )



**Figure 1** 治療の期待信念と催眠予期が主観的催眠反応性に及ぼす影響

であった。これらの交互作用について単純傾斜分析を行うため、Aiken & West (1991) に従い、治療の期待信念と普段以上の能力発揮信念の各平均値  $\pm 1SD$  の値を投入し、単純傾斜分析を行った。治療期待×催眠予期の交互作用 (Figure 1) では、治療の期待信念が高い場合には、催眠予期が主観的催眠反応性に影響を及ぼさず ( $b = -0.43$ ,  $\beta = -.23$ ,  $p > .10$ )、治療の期待信念が低い場合に催眠予期が主観的催眠反応性に影響を及ぼす、すなわち、催眠予期が高くなるにつれて主観的催眠反応性が高まることが示された ( $b = 0.99$ ,  $\beta = .55$ ,  $p < .001$ )。普段以上×催眠予期の交互作用 (Figure 2) では、普段以上の能力発揮信念が高い場合には、催眠予期が主観的催眠反応性に影響を与える、すなわち催眠予期が高くなるにつれて主観的催眠反応性が高まることが示された ( $b = 0.79$ ,  $\beta = .44$ ,  $p < .01$ )。一方で、普段以上の能力発揮信念が

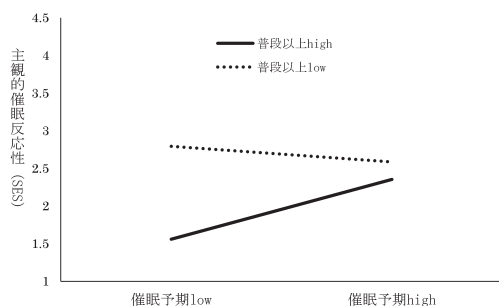


Figure 2 普段以上の能力発揮信念と催眠予期が主観的催眠反応性に及ぼす影響

低い場合には、催眠予期は主観的催眠反応性に影響を及ぼさないことが示された ( $b = -0.21, \beta = -.12, p > .10$ )。

## 考 察

本研究では、催眠予期と各催眠状態信念が被催眠性に及ぼす影響について、被催眠性を行動的催眠反応性と主観的催眠反応性の2側面に分け、階層的重回帰分析により検討を行った。その結果、2つの側面で異なる結果が得られた。すなわち、行動的催眠反応性(HGSHS:A)を目的変数とした催眠状態信念と催眠予期による階層的重回帰分析の結果からは催眠状態信念の調整効果についての仮説は支持されず、その一方で、主観的催眠反応性(SES)を目的変数とした階層的重回帰分析の結果からは、催眠状態信念が催眠予期と主観的催眠反応性の間の調整変数としての役割を果たすことが示された。主観的催眠反応性と催眠状態信念の関連について検討したShimizu (2014)の結果からは、催眠状態信念が催眠予期とは独立して主観的催眠反応性に影響を及ぼす可能性も考えられた。しかし、催眠予期との関連において検討した今回の結果からは、Step 1の治療的期待信念と普段以上の能力発揮信念において標準偏回帰係数が有意であったものの、決定係数は有意ではなかった。つまり催眠予期を統制した場合には、催眠状態信念が主観的催眠反応性に及ぼす直接的な影響は認められなくなることが示された。

これらの結果から、少なくとも主観的催眠反応性においては、催眠暗示に対する自身の反応について高い予期を持っていたとしても、個々人の有する催眠状態に対する信念の種類や程度の違いによって、実際に催眠を受けた際の体験に違いが生じるという

ことが示された。つまり人々が催眠に入る程度についての自己予測は、自分が思い描いている「催眠状態」に基づいて行われ、それが催眠の体験にも反映されているということが示されたといえよう。このことはBarber (1969 戸田訳 1975)の指摘を支持する結果といえる。

一方で、行動的催眠反応性においては仮説通りの結果が得られなかった。従来の研究で示されてきた行動的催眠反応性と催眠予期の相関関係も本研究では認められなかったため、今回の結果のみで行動的催眠反応性と催眠予期の関連において催眠状態信念の調整効果がなかったと結論づけることはできない。本研究で行動的催眠反応性と催眠予期の間に正の相関が認められなかった可能性としては、2点考えられる。ひとつは、催眠暗示に対する反応に関する自己予測の指標の問題である。今回は催眠状態信念との対応を考えて「どの程度催眠にかかると思うか」というように「催眠」を全体的に捉え、それに反応する程度についての催眠予期を指標として用いた。近年の研究では特定の催眠暗示に対する反応予期を多く取り上げ、被催眠性との関連を見出しきっているため、今後、反応予期を用いた検討も行う必要があると考えられる。二つ目として、催眠予期の調査時期の問題があげられる。今回の研究では、質問紙調査の段階で催眠予期を尋ねており、HGSHS:Aによる催眠は後日行われたため、催眠予期と実際の催眠の体験(被催眠性の測定)との間に時間的間隔が空いたことも有意な相関が認められなかった原因のひとつかもしれない。今後の研究では、催眠予期と催眠実施の時間的間隔の影響も考慮する必要があると考えられる。

このように催眠予期の調査について課題が残るといふ今回の結果の限界を踏まえううえで、主観的催眠反応性における催眠状態信念の調整効果の内容についての考察を進める。今回、主観的催眠反応性において調整効果が認められたのは、催眠状態信念のうち、治療的期待信念と普段以上の能力発揮信念であった。これらの信念が被催眠性に影響を及ぼすという点では、先行研究(Shimizu, 2014; Shimizu, [in press](#))の結果と一致する。

治療的期待信念の結果については、仮説とは異なり、参加者が治療的期待信念を持たない場合に催眠予期が主観的催眠反応性に影響することが示され

た。このことは、治療的期待信念の高群では催眠予期が主観的催眠反応性に影響を及ぼしていないことを示唆しており、高い治療的期待信念を有する人々においては、自身の催眠反応への予期の程度によらず、催眠暗示に対して不随意的な体験を報告する、つまり催眠で生じる体験を積極的に受け入れようとしていると考えられる。心理臨床実践においては、催眠を用いる際の事前準備としてクライアントに催眠や催眠による介入の結果にポジティブな催眠予期を持たせることが重要であると指摘されている (Lynn & Kirsch, 2006; Sliwinski & Elkins, 2013) が、今回の結果を踏まえると、そのためにまずは催眠によって治療的に有益な状態を得ることができるといったポジティブな催眠状態信念がクライアントに形成されることが必要であると考えられる。

一方、普段以上の能力発揮信念の調整効果に関しては仮説を支持する結果が得られた。すなわち、こうした催眠状態信念を有している場合には、催眠暗示に対する自身の催眠反応の予期が被催眠性、少なくとも主観的催眠反応性を左右することが示された。普段以上の能力発揮信念は、催眠によって日常の自分とはかけ離れた状態にされるということを意識する内容の信念で、比較的ネガティブな感情的催眠態度の形成に影響する (Shimizu, 2014)。そのような催眠状態を自身が体験するであろうという自己予測を有している場合には催眠体験を受け入れやすく、反対に催眠予期が低い場合、つまり普段以上の能力発揮信念に示されるような催眠状態に自分は「ならない」と予期している場合には、自身の行動的反応に対する解釈として、主観的には不随意的な催眠体験をしていないと報告しているということになる。このことは、自身が催眠状態になる程度を自己予測する際には、催眠で「日常の自分とはかけ離れた状態にされる」ことをどの程度受け入れるかということについての判断がなされ、それが実際の催眠体験の受け入れに影響しているということを示唆している。

治療的期待信念が低い場合も、催眠状態を普段以上の能力発揮信念を含む他の3つの催眠状態信念 (解離離人様体験信念、自己コントロール喪失信念、普段以上の能力発揮信念) のような状態として比較的ネガティブに捉えられていることが考えられる。治療的期待信念以外の3つの催眠状態信念は、「催

眠によって自分が操作される」という点で共通した考えである。こうしたことから治療的期待信念が低い場合に催眠予期が主観的催眠反応性に影響することについても、普段以上の能力発揮信念の調整効果と同様に、「催眠によって自分が操作される」ことを受け入れる程度が催眠中の主観的体験に影響したと考えることができるであろう。

心理臨床実践における催眠の使用では、クライアントの有する催眠に対する誤った信念を修正することも事前の作業として重要視されている (Yapko, 2012)。ここでの「誤った信念」というのは、主に催眠者によって操られるという考えのことを指している。今回得られた知見からも、催眠によって操作されるといった催眠状態信念の修正は、そうした状態になることを受け入れたくないというクライアントの催眠に対する不要な抵抗を取り除くという点で必要な作業であるといえよう。

今回、部分的にはあるが催眠予期と被催眠性の関連における催眠状態信念の調整変数としての役割を明らかにすることによって、人々がどのような考えを持って催眠反応の程度に対する自己予測を行い、催眠の体験に反映されているかが示された。今回の知見から示唆されることを踏まえ、さらにクライアントが有する催眠状態信念にどのように介入することが自身の催眠予期や被催眠性、ひいては治療効果を高めるかを検証していくことで、催眠を用いた心理臨床実践への応用によりつながっていくと考えられる。

## 引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. 1991 *Multiple Regression: Testing and Interpreting Interactions*. Newbury Park, CA: Sage.
- Barber, T. X., & Calverley, D. S. 1969 Multidimensional analysis of "hypnotic" behavior. *Journal of Abnormal Psychology*, *74*, 209-220.
- バーバー・T. X., 戸田 晋 (訳), 成瀬悟策 (監修) 1975 催眠 誠心書房. (Barber, T. X. 1969 *Hypnosis*. New York: Van Nostrand Reinhold Company.)
- Benham, G., Woody, E. Z., Wilson, K. S., & Nash, M. R. 2006 Expect the unexpected: Ability, attitude, and responsiveness to hypnosis. *Journal of Personality and Social Psychology*, *91*, 342-350.
- Carvalho, C., Capafons, A., Kirsch, I., Espejo, B., Mazzoni, G., & Leal, I. 2007 Factorial analysis and psychometric properties of the revised Valencia scale of attitudes and

- beliefs towards hypnosis-client version. *Contemporary Hypnosis*, **24**, 76–85.
- Green, J. P. 2003 Beliefs about hypnosis: Popular beliefs, misconceptions, and the importance of experience. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **51**, 369–381.
- Green, J. P., & Lynn, S. J. 2011 Hypnotic responsiveness: expectancy, attitudes, fantasy proneness, absorption, and gender. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **59**, 103–121.
- Johnson, M. E., & Hauck, C. 1999 Beliefs and opinions about hypnosis held by the general public: A systematic evaluation. *American Journal of Clinical Hypnosis*, **42**, 10–20.
- 笠井 仁・清水貴裕・徳田英次・斎藤稔正 2003 日本語版ハーヴァード集団催眠感受性尺度・形式 A の標準データ 日本催眠医学心理学会第 49 回大会発表論文集, 25.
- Kirsch, I. 1985 Response expectancy as a determinant of experience and behavior. *American Psychologist*, **40**, 1189–1202.
- Kirsch, I., Council, J. R., & Wickless, C. 1990 Subjective scoring for the Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility, Form A. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **38**, 112–124.
- Kirsch, I., Silva, C. E., Comey, G. & Reed, S. 1995 A spectral analysis of cognitive and personality variables in hypnosis: Empirical disconfirmation of the two-factor model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 167–175.
- London, P. 1961 Subject characteristics in hypnosis research: Part I. A survey of experience, interest, and opinion. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **9**, 151–161.
- Lynn, S. J., & Kirsch, I. 2006 *Essentials of Clinical Hypnosis: An Evidence-based Approach*. Washington, DC: American Psychological Association.
- McConkey, K. M. 1986 Opinions about hypnosis and self-hypnosis before and after hypnotic testing. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **34**, 311–319.
- Melei, J. P., & Hilgard, E. R. 1964 Attitudes toward hypnosis, self-predictions, and hypnotic susceptibility. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **12**, 99–108.
- Montgomery, G. H., Schnur, J. B., & David, D. 2011 The impact of hypnotic suggestibility in clinical care settings. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **59**, 294–309.
- Shimizu, T. 2014 A causal model explaining the relationships governing beliefs, attitudes, and hypnotic responsiveness. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **62**, 231–250.
- Shimizu, T. 2016 Role of beliefs about hypnotic states as a moderator variable: A re-examination of the relationship between reactance and hypnotizability. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **64**, 167–186.
- 清水貴裕・小玉正博 2001 催眠状態イメージと催眠態度との関連 筑波大学心理学研究, **23**, 219–227.
- 清水貴裕・徳田英次・笠井 仁 2003 ハーヴァード集団催眠感受性尺度およびウォータールー・スタンフォード集団催眠感受性尺度用体験尺度日本語版の作成 日本催眠医学心理学会第 49 回大会発表抄録集, 27.
- Shor, R. E., & Orne, E. C. 1962 *Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility, Form A*. Palo Alto: Consulting Psychologists Press.
- Silva, C. E., & Kirsch, I. 1992 Interpretive sets, expectancy, fantasy proneness, and dissociation as predictors of hypnotic response. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 847–856.
- Sliwinski, J., & Elkins, G. R. 2013 Enhancing placebo effects: insights from social psychology. *American Journal of Clinical Hypnosis*, **55**, 236–248.
- Spanos, N. P., & Barber, T. X. 1974 Toward a convergence in hypnosis research. *American Psychologist*, **29**, 500–511.
- White, R. W. 1941 A preface to the theory of hypnotism. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **36**, 477–505.
- Yapko, M. D. 2012 *Trancework: An Introduction to the Practice of Clinical Hypnosis*. 4th ed. New York: Brunner/Routledge.

(受稿：2015.6.15; 受理：2015.11.11)